

明治から昭和初期にかけて活躍した 豊橋市の棟梁，中神米作・富次に関する資料

伊藤 晴 康

I. はじめに

中神米作は、大正初期に豊橋ハリストス正教会聖堂の建設工事を請け負ったばかりでなく、東三河一円で多くの建設工事に関わったことが知られている。豊橋市を中心とする近代東三河において、それまでになかった新たな建築様式と技術を地元技術者たちがどのようにもたらし、実現していたのかを知ることは地域文化史の観点からとても重要である。

本稿は、拙稿「豊橋ハリストス正教会聖堂の施工に関わった職人について——大工棟梁の中神米作と富次を中心に——」に引き続き、大工棟梁の中神米作とその長男である富次に焦点を当て、今回新たに発見された資料を紹介しつつ、豊橋ハリストス正教会聖堂以外にどのような建築を建てたのか明らかにする。

II. 新資料の概要

中神米作の遺族とは先回の資料調査において面識があり、平成27(2015)年11月になって中神富次の長女が逝去され、その遺品の中に祖父の米作と父親の富次に関する資料が見つかったとの連絡が筆者のところにあった。それは冊子や写真などで、平成28(2016)年3月3日に中神家から許可を得て複写のために一時借用し、6月4日に同家に返却した。借用した資料のうち、本稿では特に建設業務に関わる以下のものを取り上げる。

1. 手書き冊子（表-1）

No.	表紙記載内容	日付	備考
1)	同門者連名簿 中神建築事務所	大正14年 6月21日	米作及び米作の次男中神常治(以下常治という)による文章あり 謄写版印刷
2)	父の遺業を子孫に永く伝えん 中神富次	昭和41年 6月19日	中神富次 著 原稿用紙に手書き

2. 写真 (表-2)

No.	写真の内容	寸法 (縦×横)	備考
1)	御殿(みどの)銀行	280mm×210mm	枠入り
2)	宝飯病院開業式	297mm×380mm	枠入り
3)	職人一同の集合写真	297mm×390mm	枠入り
4)	武田家の薬師堂	280mm×200mm	枠なし
5)	豊橋ハリストス正教会聖堂上棟式	297mm×422mm	枠入り

注: 寸法は枠を含む

III. 手書き冊子について

1. 「同門者連名簿」 (表-1 No1)

中神建築事務所の名義で大正14(1925)年6月21日の日付がある。藁半紙に謄写版印刷されている。米作による「門下の諸子に告ぐ」と題された文章と、米作の二男常治による「名簿配付の件」と題された文章が名簿の前に掲載されている。名簿には米作の下で修業し、独立していった者の氏名、入門年月、入門年齢、勤メ年数、現住地が掲載されている。名簿に掲載された人数は58人であり、このうち修業中とされている徒弟の人数は7人である。富次と常治の両名及び修業中の者のみ勤メ年数が空欄となっており、在職中であることがわかる。当時米作は豊橋市内では比較的大規模な請負業者となっており、大正14年版の『豊橋商工案内』¹⁾にも掲載されている。「門下の諸子に告ぐ」の文中で、米作は「老津村大平寺(原文のまま)の建設の際は世は関東震災の影響を受け忙殺暇なきをも顧みず遠路萬難を廃し其のほとんど余らず来援を被り其の際勇健なる姿を見て喜べり」と記述しており、大規模な工事である太平寺の仕事を請け負う際に独立していった弟子たちが工事を手伝いに来たことが読みとれる。豊橋市老津町にある太平寺に確認したところ、この建物は現存する庫裏であるとのことであった。庫裏の棟札には大正14年1月7日という日付があり、棟梁として米作、棟梁脇として富次他2人の名前が記載されている。また、棟札に名前のある大工49人のうち、名簿に名前がみられる者は37人であった。

2. 『父の遺業を子孫に永く伝えん』 (表-1 No2)

富次による手書き冊子である。同時期に執筆された『故山の思い出』²⁾が豊橋市図書館に寄贈されているのに対し、この冊子は寄贈されておらず、家族向けの内容となっている。主に富次の父である米作の生涯について記述されており、後半には富次の母の生涯や中神家の祖先についての記述がみられる。富次自身の仕事に関する記述はほとんどないが、学歴に関して明治41(1908)年3月に八町高等小学校を卒業し父の仕事に従事することになった旨の記述がある。(同冊子p. 5)また、富次の大工

1 鈴木澄衛 編『豊橋商工案内』大正14年版、豊橋商業會議所、1925年、p. 144.

2 中神富次『故山の思い出』私家版、1967年(豊橋市中央図書館所蔵)。

としての修業と勉学に関して以下の記述がある。(同冊子p.6)

明治四十三年田原商工銀行が札木町に新築される時常に取り引きして居る、関屋町の白富材木店主の福井さんが其の田原銀行の縁故で工事の材木を納入することになり仕事は又田原銀行の縁故ある渡辺華山先生の孫弟子に当ると云ふ、鐮木さんと云ふ画家の心安い東京の清水組の棟梁をして居る東京都下谷区谷中清水町一番地の能村仁三郎さんと云ふ親方が仕事をするので、東京から大工さんが二三人来たので、白富さんの世話で大工職人や人夫等は皆私方で仕事をする事になった、其の当時は豊橋地方では西洋館の仕事は珍らしかつた、私も東京に行つて西洋館の仕事は修業したいと思つて居た矢先なので白富さんのお世話で能村の親方の処に弟子入りした、夜るは蔵前の東京高等工業学校の建築科の夜間部に通つて四ヶ年³の修業をして大正三年頃帰宅して父の仕事に従事した(原文のまま)

文中名前の出てくる画家「鐮木さん」とは、渡辺小華の弟子であつた鐮木華国⁴(本名: 鐮木武輔)であると推察される。当時の全国の銀行や企業の一覧である『帝国銀行會社要録』⁵大正元(1912)年版には、田原商工銀行の支配人として鐮木武輔が掲載されており豊橋支店は「豊橋市札木開設明治四十三年五月」と記載されている。また、平成18(2006)年に開催された豊橋市二川本陣資料館による『絵葉書のなかの豊橋——思い出の風景をたずねて——』⁶展の展示図録に田原商工銀行豊橋支店の写真が掲載されており、解説に「明治45年札木町へ移転した田原商工銀行の絵葉書、大正5年の年賀状」とある。従つて富次が記述しているのはこの移転工事に関する事項と推察される。⁷

富次が弟子入りした能村仁三郎については、清水建設の協力会社で組織される兼喜会の五十年誌『清水建設兼喜会五十年』⁸に明治25(1892)年当時の匠友会(清水組大工組合)の副会長として氏名が掲載されていることから、清水組に協力する棟梁の中でも有力な者であつたことが伺える。

富次が通つたと記述している「蔵前の東京高等工業学校の建築科の夜間部」とは、東京高等工業学校附属工業補習学校を指すものと推察される。『東京高等工業学校四十年史』⁹によれば、同校は、東京高等工業学校附設工業教員養成所付属工業補習学校として明治32(1899)年に夜間学校として設置され、明治43(1910)年に工業教員養成所の付属より東京高等工業学校の付属に移管されたと記録されている。当該学校に関して以下の説明がある。¹⁰

第十七章 元附属工業補習學校

3 富次 著『故山の思い出』には「三年餘り学んで来て父の業に従事した」とある(同書p.141)。

4 白井烟嵐『東三河画人伝』豊橋文化協会、1973年、pp.56-59。鐮木華国について「銀行に勤務する傍ら小華に師事して頭角を現わした」(p.57)との記述がある。

5 帝国興信所 編『帝国銀行會社要録』大正元年版、帝国興信所、1912年。

6 豊橋市二川本陣資料館 編『絵葉書のなかの豊橋——思い出の風景をたずねて——』豊橋市二川本陣資料館、2006年、p.90。

7 田原商工銀行豊橋支店が移転した件は、当時の新聞でも確認できる。『新朝報』明治45年1月11日号に「商業登記 株式会社田原商工銀行登記事項中變更 豊橋支店ヲ豊橋市札木町六拾参番地ノ登記へ移転ス 明治四十五年一月八日登記」という登記公告が掲載されている。

8 兼喜会五十年史編纂委員会 編『清水建設兼喜会五十年』清水建設東京兼喜会、1969年、資料編p.21。

9 東京高等工業学校 編『東京高等工業学校四十年史』東京高等工業学校、1922年、pp.78-79。

10 同上 p.78。

本校は明治三十二年工業教員養成所附属として設置せられ主として晝間服業の工人に必須なる知識技能を補習せしめ兼ねて工業補習学校の組織及び其教育法の研究に資せんが為めに設立せられたるものにして夜間其他業務の餘暇に於て學業を授け職工其他の技術員を養成し其社會上の位置を向上せしむるを以て主たる目的とせり。

また、明治37(1904)年に発行された『東京高等工業学校附設工業教員養成所付属工業補習学校報告』という冊子の中には以下の説明がみられる。¹¹

明治三十五年九月本校規則改正の要点并に其主旨

(前略)則ち國家が東京高等工業学校の晝間生徒の爲にせる多大の設備をば更に夜間二重に使用して直接工業に従事せるものに實業に関する知識を與へんとしたるものにして主として都府の地に於ける技藝補習学校の模範たらしめんとせるもの彼の外國に於ける「ポリテクニックスクール」の制に類せるものなり

同冊子には開講科目と担当教員が掲載されており、明治37(1904)年当時の東京高等工業学校の教授、助教授が担当している科目も多くみられる。建築に関する科目の例をあげれば、表-3のとおりとなっている。¹²

表-3 明治37(1904)年当時の開講科目と授業担当者

教科目	毎週教授時間			授業回数	講師
	一學期	二學期	三學期		
規矩法	1	1	1	36	東京高等工業学校教官 斎藤兵次郎
建築製圖 普通	2	2	1.5	33	東京高等工業学校助教授 松尾良助
建築製圖 初歩	2	2	1.5	32	同
自在圖及圖案科	3	3	2.5	30	東京高等工業学校助教授 小室信蔵 同上 安田録造(注)
家屋構造	1	1	1	31	東京高等工業学校教授 滋賀重列

注: 表中の「安田録造」は「安田禄蔵」の誤記と推察されるが本表では原文のまま表記する

これらのことから、この学校は当時の東京高等工業学校の施設を利用でき、授業科目の多くを東京高等工業学校の教員が担当するという非常に恵まれた教育環境であったことが確認できる。しかしながら富次が在籍した明治44(1911)年から大正3(1914)年当時の教員構成に関する資料は見つからない。卒業者名簿に富次の名前があるかどうかを確認するため、同校の同窓会組織である蔵前修工会の名簿を確認した。同校は大正12(1923)年、関東大震災の際に校舎が焼失したとの記録

11 東京高等工業学校附設工業教員養成所付属工業補習学校 編『東京高等工業学校附設工業教員養成所付属工業補習学校報告』同校, 1904年, p. 6.

12 同上 p. 18.

があり、入手可能であったもののうち最も古い昭和10(1935)年発行の名簿¹³に掲載されている大正12(1923)年以前の卒業生は少なく、富次の名前は確認できなかった。

一方、この学校とは別に同時期に東京高等工業専門学校の附属学校として「東京工業高等学校附属職工徒弟学校」と称する学校も存在していた。この学校についての資料として『東京工業高等学校附属職工徒弟学校一覧』¹⁴という報告書が毎年発行されており、在學生と卒業生の名簿が掲載されている。明治44(1911)年から大正4(1915)年にかけて調査してみたところ、在學生、卒業生に富次の名前は見られず、夜間部があった旨の記録も見られない。

IV. 写真について

1. 御殿（みどの）銀行（表-2 No1）（写真-1）

一部に足場が残っているが、ほぼ外観が完成している状態の写真である。裏面に「北設楽郡本郷村 御殿銀行支店 設計施工 中神富次 大正八年三月初工」と手書きされている。この建物は平成15年に解体されている。

瀬口哲夫、竺覚暁編『近代建築ガイドブック 東海・北陸編』¹⁵によれば、この建物は設計施工者不詳、竣工は大正10(1921)年頃とされている。同書の解説には「山間部の建物とは思えないほど手堅くまとめられた建物である」と評されている。富次の東京での修業と勉学の成果が遺憾なく発揮された建物であったといえる。

また、『愛知県史 別編 文化財1: 建造物・史跡』では「従来の近代建築史研究では必ずしも著名な建築とは扱われなかった物件も複眼的な視点で評価すると、多くの物件にその存在意義を見出すことができる。」¹⁶として例示する建物の中で、御殿銀行を取り上げ以下のように評している。

（前略）旧御殿銀行本店のように木造構築物の外観に赤煉瓦に似せたタイルを貼るという工夫は、耐火性能の確保を図りながら、「辰野式」の建築を建てていくという建築の「強」と「美」の両者にわたる現象であるが、これは、従来の研究では見落とされてきた地方都市における建築の近代化の事例として位置づけられる重要な現象である。

前述のとおり、富次による手書き冊子『父の遺業を子孫に永く伝えん』（本稿Ⅲ-2）に、田原商工銀行豊橋支店に関する記述がある。工事に関して材木商や大工棟梁の名前が出てくることから、田原商工銀行豊橋支店も木造であったと推察される。田原商工銀行豊橋支店は現存しないが、絵葉書にその外観写真が残されている。（写真-2）この写真を見ると1階窓開口上部にまぐさとなる部材が見られないことから、基壇や柱頭部等に石材を使用している可能性はあるものの主要な部分は木造モルタル仕上げであると考えられる。田原商工銀行豊橋支店と御殿銀行の建物には多くの類似点があ

13 蔵前修工会 編『會員名簿(昭和拾壹年用)』蔵前修工会、1935年。

14 東京高等工業学校附属職工徒弟学校 編『東京工業高等学校附属職工徒弟学校一覧』

15 同書 p. 119.

16 愛知県史編さん委員会 編『愛知県史 別編 文化財1: 建造物・史跡』愛知県、2006年、pp. 337-338.

る。両者は共に2階建て組積造風の外観を持つ木造建築であり正面が3スパンである。また、正面中央部柱頭の装飾(写真-3,4)や屋根の形状にも類似性が見られる。田原商工銀行豊橋支店の施工は、のちに富次が東京で修業することになる能村仁三郎が手掛けていることから、富次が御殿銀行を設計・施工する際に田原商工銀行豊橋支店を参考にした可能性は高い。このように田原商工銀行豊橋支店建設から富次の東京での修業・勉強を経て御殿銀行本郷支店建設へと至る経緯は、組積造風の外観を持つ木造建築を設計施工する技術が東三河地域に伝播する過程の一例を示すものである。



写真-1 御殿(みどの)銀行



写真-2 田原商工銀行豊橋支店¹⁷

17 写真-2 出典：豊橋市二川本陣資料館 編『絵葉書のなかの豊橋——思い出の風景をたずねて——』豊橋市二川本陣資料館, 2006年, p. 90.



写真-3 御殿銀行柱頭及びペディメント
(写真-1部分拡大)



写真-4 田原商工銀行豊橋支店柱頭
(写真-2部分拡大)

なお、多くの資料でこの建物は旧御殿銀行の本店とされており、写真裏書にある「支店」と異なっている。一方、写真の建物正面上部のペディメントには「株式会社 御殿銀行支店」と表示されていることが判別できる。(写真-3)また、平成19(2007)年に発刊された『東栄町誌』¹⁸には、御殿銀行について以下の記述がある。

この地方でも、いち早く明治三〇年には地元の資産家を中心となって「御殿銀行」が、御殿村大字中設楽字外貝津七番地に設立された。中設楽の本店のほか、本郷村、田口町大字田口四四番戸(現設楽町田口)、長野県且開町(新野)の三か所に支店を有していた。大正十五年には本郷町万場通りの店舗(旧東栄郵便局舎、旧東三信用組合・豊川信用金庫店舗として平成十五年まで残存)を新築し、昭和四年にその幕を下ろすまで、この地方の金融の中核として機能した。

さらに、『帝國銀行會社要録』大正15年版には御殿銀行の支店について「田口支店北設楽郡田口町田口 本郷支店同郡本郷町本郷 新野支店(長野県参照)」¹⁹と記載されており当該建物は当時の本郷村(大正10年より本郷町)に立地している。以上のことから、当該建物は御殿銀行本郷支店として建設されたことが確認できる。

竣工時期について『東栄町誌』には当該建物は大正15(1926)年新築と記述されている。当該部分の執筆者に確認したところ、竣工年は役場の家屋台帳の日付を根拠としているとの回答を得た。

18 東栄町誌編集委員会 編『東栄町誌「自然・民俗・通史編」』北設楽郡東栄町、2007年、pp. 1274-1275.

19 帝国興信所 編『帝國銀行會社要録』大正15年版、帝国興信所、1926年、愛知県 p. 7.

また、『愛知県史 別編 文化財1: 建造物・史跡』には、御殿銀行は昭和2(1927)年竣工と²⁰ある。執筆者に確認したところ、竣工年は銀行の資産台帳を根拠としているとの回答を得た。写真の裏書に「大正八年三月初工」と記載されている点と、これらの資料に誤りがないと仮定すると、大正8(1919)年3月に当該建物が着工され、竣工・引渡しまで時間がかかり大正15(1926)年になって建物が家屋台帳に登録され、翌昭和2(1927)年に銀行の資産台帳に登録されたと考えられる。着工から開業するまでの期間が長くなった理由を示唆する資料がある。大正15(1926)年に発行された『愛知県風物誌』²¹の中で、北設楽郡について以下の説明がある。

山林経営の失敗

前述の如き植林事業が生んだ経済上の行きづまりは本郡において最も顕著なるものがある、それは目下御殿村の御殿銀行田口町の北設楽銀行の興廃に関する程の事実を生み出してゐる、歐州戦後の好況をくつて山間僻地にも投機的な植林その他事業熱が高まつて來た時に、山林担保で「よいわゝ」で貸出した兩銀行の金が今日になつてちつとも廻収出來ない破目に陥つた、
(以下略)

このことから、御殿銀行の経営不振による工事の中断あるいは遅れが生じたと推察される。

2. 宝飯病院開業式 (表-2 No2) (写真-5)

かつて宝飯郡国府町に建てられた宝飯病院の開業式の写真である。裏書には以下の記述がある。記述内容から富次が書いたものと考えられる。

棟梁(遺業は大きい)中神米作 (中略) 明治四十年

宝飯病院開業式 国府町宝飯病院 国府山公園のふもとに新築

○明治四十年当時は乗り物の便もなく自轉車も町の内でも何台と云ふほどしかなかつたので二里や三里の道は平気でテク、歩いたのだ。此の病棟は後、新城町に移轉して、町役場とか又は外の庁舎にしたと聞く。

この裏書から、宝飯病院の建物は新城町(現在の新城市)に移築されたことがうかがえるが、移築された施設が何なのかは特定できていない。また『豊川市医師会史』第一巻には、明治40(1907)年の項目に「宝飯病院の設立決まる」という見出しがあり、次のように記載されている。²²

◎私立[宝飯]病院の設立

既報の如く宝飯郡武田賢治、白井九一郎の両氏を始め外十数名発企となり今回資本金一万五千円以て同郡御津村神宮山の麓に一大私立病院を設立することに決し近々該工事に着手する筈なるが院長には福岡病院在勤中の某医学博士を招聘することに内定し居れる由(『新朝報』、明治40.6.25付)

一方、明治44(1911)年に発行された『御油案内』²³には、宝飯病院の広告が写真と共に掲載され

20 愛知県史編さん委員会 編『愛知県史 別編 文化財1: 建造物・史跡』愛知県、2006年、p. 333.

21 村田直治『愛知県風物誌: 郡役所廢止記念』早川文書事務所、1926年、p. 96.

22 豊川市医師会史編纂委員会 編『豊川市医師会史』第一巻、豊川市医師会、1992年、p. 413.

23 小泉良之助 編『御油案内』世賜堂、1911年.

ているほか、名勝の項目に「新宮山と病院の景」として宝飯病院の写真が掲載され「山上に屹立せるは記念碑正面半洋の家これ宝飯病院」と説明がついている。(同書冒頭部分ページ番号なし)このほか、国府町の項目に「同町と廣石塚なる新宮山懐、宏荘の家これ宝飯病院なり眼科専門の醫師もありて中々繁忙を極む」と説明されている。(同書p.122)

宝飯病院に関しては、『御油案内』に2枚の不鮮明な写真が掲載されている他には、この地域に関する写真集等の中に建物の写真は見つかっていない。²⁴ 従って今回発見された写真は公開されている宝飯病院の外観写真としては最も鮮明な写真と考えられる。

宝飯病院は『御油案内』に「半洋の家」と解説されている通り、疑洋風の外観である。和風の入母屋瓦葺きの屋根を持つが、下見板張りの外壁や開口部は洋風であり、玄関ポーチの上部は手すりが付いたバルコニーになっている。また、玄関上部入母屋屋根の妻面にアーチ状のくぼみを設けられ、十字型が浮き彫りになっていて病院であることを明示している。(写真-6)



写真-5 宝飯病院開業式 明治40(1907)年

24 以下の写真集を調査した

1. 原田直実 編, 大林淳男 監修 『東三河今昔写真集』 樹林舎, 2005年.
2. 折井克比古 他 編 『豊川・蒲郡・新城・北設の昭和: 写真アルバム』 樹林舎, 2011年.
3. 豊川市郷土史研究会 編 『写真集明治大正昭和 豊川』 国書刊行会, 1981年.
4. 夏目勝弘 編 『今昔三州宝飯郡東海道沿い: 写真で見る郷土史研究』 豊川桜町校区の昔を知る会, 2007年.
5. 奏基 監修 『目で見える東三河の100年: 豊橋市・豊川市・蒲郡市・新城市・宝飯郡・渥美郡・北設楽郡・南設楽郡』 郷土出版社, 1991年.
6. 山本瑳一 監修 『豊川・宝飯いまむかし: 写真集』 名古屋郷土出版社, 1989年.



写真-6 宝飯病院 玄関上部屋根妻面の十字型 (写真-5部分拡大)

3. 職人一同の集合写真 (表-2 No3) (写真-7)

工事途中の建物の前に職人たちと中神家の家族が集合して撮影した写真である。裏書に「大正十年四月」と記載され、写真に写る人物の名前が位置関係とともに書かれている。これにより、中神米作と富次の顔が判別できた。(写真-8,写真-9)背面に写っている建物に関する情報は得られていない。



写真-7 職人集合写真 大正10(1921)年



写真-8 中神米作
(写真-7部分拡大)

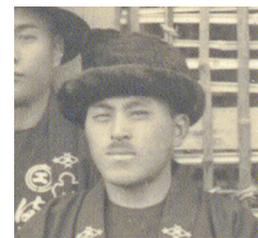


写真-9 中神富次
(写真-7部分拡大)

4. 武田家の薬師堂（表-2 No4）（写真-10）

裏書に「昭和8年 杉山村字河内武田家の薬師堂入佛式」とメモがある。また「棟梁 中神富次右の柱の前」とも記載されており、昭和8(1933)年当時の富次の顔が確認できた。（写真-11）



写真-10 武田家の薬師堂 入佛式
昭和8(1933)年



写真-11 中神富次
（写真-10部分拡大）

5. 豊橋ハリストス正教会上棟式（表-2 No5）（写真-12）

この写真は同じものが豊橋ハリストス正教会にも保管されており新規の資料ではないが、今回借用した写真をスキャナでデータ化して拡大し、上述の職人集合写真及び武田家の薬師堂の写真との照合を行うことで上棟式の写真に写っている人物の中に中神米作と富次らしき人物がいることが確認できた。（写真-13,14）また遺族の証言によれば、富次は豊橋聖堂の仕事が入ったという理由で東京から豊橋に呼び戻されたとのことである。²⁵

一方、写真の裏面には「中八町ハリストス正教会 明治四十四年頃と思う」と書かれているが、富次の関与についての記述はない。同教会日誌の記録によれば、上棟式は大正2(1913)年6月3日である。²⁶ 富次の著した『父の遺業を子孫に永く伝えん』によれば、大正2(1913)年6月当時、富次はまだ東京で修業中のはずである。上棟式に富次も参加していたのであれば修業中に一時的に豊橋に戻ってきたことになる。

25 伊藤晴康「豊橋ハリストス正教会聖堂の施工に関わった職人について——大工棟梁の中神米作と富次を中心に——」『豊橋創造大学研究紀要』第18号, 2014年, p. 62.

26 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌」『豊橋市美術博物館研究紀要』5号, 豊橋市美術博物館, 1996年, p. 81.

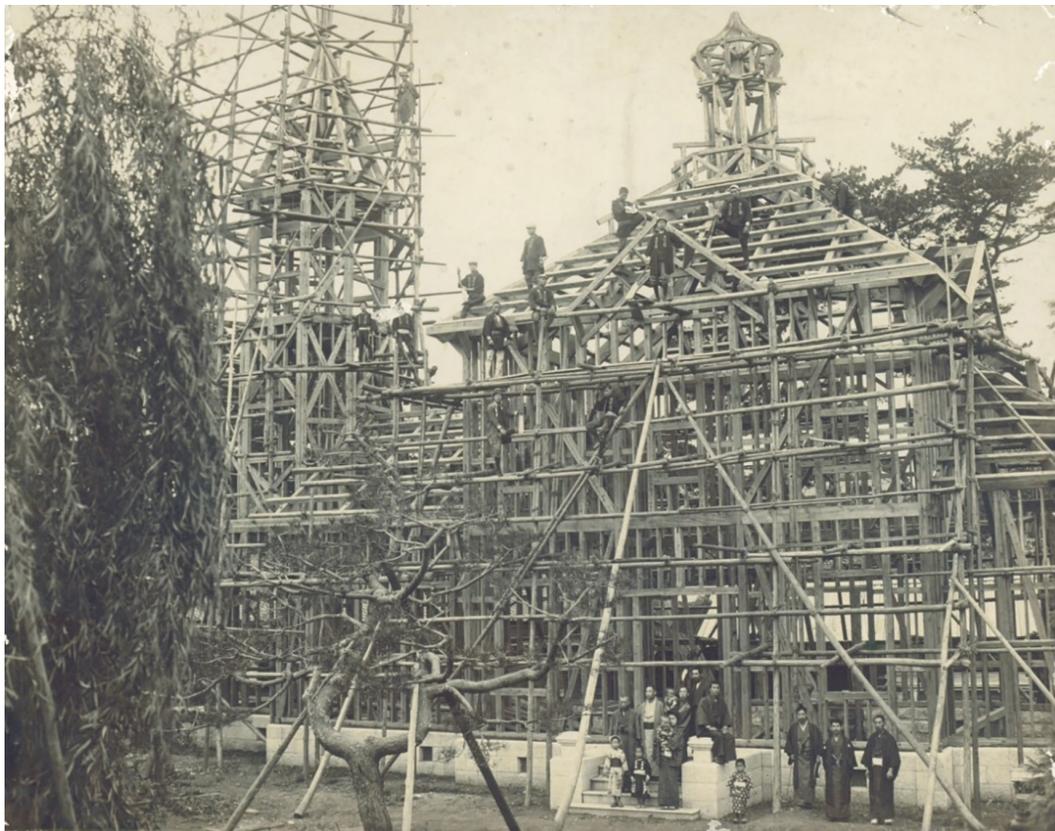


写真-12 上棟式写真 大正2(1913)年



写真-13 上棟式写真の米作
(写真-12 部分拡大)



写真-14 上棟式写真の富次と思われる人物
(写真-12 部分拡大)

V. まとめ

本稿で明らかになった点は以下のとおりである。

1. 「同門者連名簿」から大正14(1925)年までに中神工務所で修業した大工の氏名が判明した。また、大正14(1925)老津村太平寺庫裏建設時の棟梁が米作であり、名簿に掲載された58人のうち38人が工事に参加していたことが確認できた。
2. 富次が著した冊子『父の遺業を子孫に永く伝えん』から、富次が東京に行き、清水組の有力な協力業者であった棟梁能村仁三郎の下で修業をしながら夜学に通ったと述べていることがわかった。この夜学については、東京高等工業学校付属工業補習学校であったと推察される。これにより拙稿「豊橋ハリストス正教会聖堂の施工に関わった職人について——大工棟梁の中神米作と富次を中心に——」で課題としていた事項のうち、富次の東京での修業先と、修業しながら通った学校についての情報が得られた。また、写真資料の照合によりハリストス正教会上棟の際に米作と共に富次も工事に参加していた可能性が高いことがわかったが、建設にあたって富次が果たした役割は不明である。
3. 御殿銀行の写真裏書から、これまで不詳とされていた当該建物の設計・施工者が富次であることがわかった。富次が御殿銀行を設計・施工するにあたり、富次の東京での修業先である大工棟梁能村仁三郎が豊橋で手掛けた田原商工銀行豊橋支店を参考にしていると考えられる。この経緯は、組積造風の外観を持つ木造建築を設計施工する技術が東三河地域に伝播する過程の一例を示すものである。その他、これまで多くの資料で御殿銀行本店とされてきた建物は同行本郷支店であり、竣工当時「御殿銀行支店」と建物に表示してあったことが明らかになった。工事時期については大正8(1919)年に着工の後、大正15(1926)年までの間に竣工し、大正15(1926)年に町の家屋台帳に登録され、翌昭和2(1927)年に銀行の資産台帳に登録されたと考えられる。竣工まで時間がかかった理由は御殿銀行の経営不振であると推察される。
4. 宝飯病院の写真からこの建物の棟梁が米作であることがわかった。またこの写真は現在写真集等で確認できる宝飯病院の写真の中で最も鮮明な画像と推定される。

VI. 謝辞

本稿を執筆するにあたり貴重な資料を貸与してくださった中神家の皆様に篤く御礼を申し上げる。また、御殿銀行に関する情報収集にあたり東栄町役場の金田新也様(元東栄町誌編さん事務局)、名古屋大学大学院の西澤泰彦先生(愛知県史当該部分執筆担当者)、豊橋創造大学短期大学の佐野真一郎先生にお世話になった。豊橋市二川本陣資料館には田原商工銀行の写真掲載の許可をいただき、豊橋市美術博物館には田原商工銀行豊橋支店の写真データをご提供いただいた。また、太平寺の閑栖彦坂宗丘様には、庫裏の棟札を拝見させていただいた。また妻敦子には手書き文字の判読に協力を得た。併せて御礼を申し上げたい。

参考文献

論文

1. 伊藤晴康「豊橋ハリストス正教会聖堂の施工に関わった職人について——大工棟梁の中神米作と富次を中心に——」『豊橋創造大学研究紀要』第18号, 2014年, pp. 61-71.
2. 秦基「豊橋ハリストス正教会教会誌」『豊橋市美術博物館研究紀要』5号, 1996年, 豊橋市美術博物館, pp. 76-105.

書籍

1. 愛知県史編さん委員会 編『愛知県史 別編 文化財1：建造物・史跡』愛知県, 2006年.
2. 原田直実 編, 大林淳男 監修『東三河今昔写真集』樹林舎, 2005年.
3. 折井克比古 他 編『豊川・蒲郡・新城・北設の昭和：写真アルバム』樹林舎, 2011年.
4. 兼喜会五十年史編纂委員会 編『清水建設兼喜会五十年』清水建設東京兼喜会, 1969年.
5. 蔵前修工會 編『會員名簿(昭和拾壹年用)』蔵前修工會, 1935年.
6. 小泉良之助 編『御油案内』世賜堂, 1911年.
7. 白井烟崑『東三河画人伝』豊橋文化協会, 1973年.
8. 鈴木澄衛 編『豊橋商工案内』大正14年版, 豊橋商業會議所, 1925年.
9. 瀬口哲夫, 竺覚暁 編『近代建築ガイドブック 東海・北陸編』鹿島出版会, 1985年.
10. 帝国興信所 編『帝國銀行會社要録』大正元年版・15年版, 帝国興信所, 1912・1926年.
11. 東栄町誌編集委員会 編『東栄町誌「自然・民俗・通史編」』北設楽郡東栄町, 2007年.
12. 東京高等工業学校 編『東京高等工業学校四十年史』東京高等工業学校, 1922年
13. 東京高等工業学校附設工業教員養成所付属工業補習学校 編『東京高等工業学校附設工業教員養成所付属工業補習学校報告』同校, 1904年.
14. 東京高等工業学校附属職工徒弟学校 編『東京工業高等学校附属職工徒弟学校一覽』東京高等工業学校附属職工徒弟学校, 1911年-1915年.
15. 豊川市医師会史編纂委員会 編『豊川市医師会史』第一卷, 豊川市医師会, 1992年.
16. 豊川市郷土史研究会 編『写真集明治大正昭和 豊川』国書刊行会, 1981年.
17. 豊橋市二川本陣資料館 編『絵葉書のなかの豊橋——思い出の風景をたずねて——』豊橋市二川本陣資料館, 2006年.
18. 中神富次『故山の思い出』私家版, 1967年(豊橋市中央図書館所蔵).
19. 夏目勝弘 編『今昔三州宝飯郡東海道沿い：写真で見る郷土史研究』豊川桜町校区の昔を知る会, 2007年.
20. 秦基 監修『目で見える東三河の100年：豊橋市・豊川市・蒲郡市・新城市・宝飯郡・渥美郡・北設楽郡・南設楽郡』郷土出版社, 1991年.
21. 村田直治『愛知縣風物誌：郡役所廢止』早川文書事務所, 1926年.
22. 山本瑳一 監修『豊川・宝飯いまむかし：写真集』名古屋郷土出版社, 1989年.

新聞

1. 『新朝報』明治45(1912)年1月11日号.